

文化財



わたしのまちの文化財



中津川では、毎年お盆に火をたいて、仏を迎えたり送ったりします。余火で行なわれる大文字焼とよく似たこの行事、起源もこの地と関わりのある京都聖護院の影響でしょうか。



金比羅山の迎え火、送り火の伊位置
● 金刀比羅社 石柱(銘 明治三十年)砂岩
● 灯籠(銘 奉迎宝前)
● 中津川奥会場
● 消防器具置場
● 印は伊釜

葛城修験道の中心の場所として、毎年京都聖護院の修験者が修行や護摩供養を行うことで知られている中津川地区。豊かな伝統、行事が数多く保存されています。

お盆の夜に浮かぶ幽玄の炎

わたしのまちの文化財その⑩ 中津川のマンドロ (万灯籠)

お盆の行事にマンドロという迎え火・送り火の行事が行われます。京都の大文字焼と同様の行事です。金比羅山の斜面に炉穴を「ノ」(ノシ字)状に17カ所配置します。炉穴は、直径約80センチ、深さ30センチほどで、松の芯木の肥松を燃やします。

近年の松枯れのために肥松が不足し、現在は製材所の廃材も利用しています。昔は紀の川平野を隔てた向かいの龍門山から見えたそうです。しかし、今は、

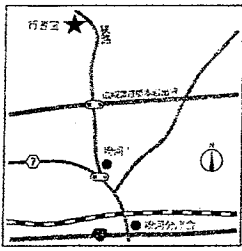
周囲の立木の成長や消防器具庫などの建設によって視界がさえぎられ、マンドロ全体を見るのは困難です。紀北地方では、各家で仏

を迎えたり送ったりするとき、ささやかに庭先で火をたく風習がありました。これほどの規模のマンドロは珍しく、近隣では見かけられることはありません。この行事は地域の人たちによって、大切に守り伝えられています。

文化財



わたしのまちの文化財



山里にひびくホラ貝と祈りの炎

わたしのまちの文化財その③ 中津川行者堂の採灯護摩供

春たけなわの4月中旬、日頃は静かな中津川地区の山里で、山伏たちの読経の声とホラ貝の音が山々にこだまし、採灯護摩供が盛大に行われます。

この護摩供には、修験宗
春たけなわの4月中旬、日頃は静かな中津川地区の山里で、山伏たちの読経の声とホラ貝の音が山々にこだまし、採灯護摩供が盛大に行われます。

行者堂前の広場では、四本柱で結界を作り、護摩壇の周りを丸太で井げたに組み、ヒバ(ヒノキ科の針葉樹)で覆います。

そして、護摩壇の前で読経、古式通りの山伏問答、法弓、法剣の儀、願文を行った後、いよいよ点火。

「天下泰平・五穀成就・家内安全」などの願いを書いた護摩札の束を炎の中へ投入し祈ります。読経が響く中で、炎と煙は高々と天を焦がします。儀式が終わった後は、餅投げがあり、大勢の参加者にぎわいます。

葛城の修験道には、加太友ヶ島から大和川上流の亀の瀬までの峰々に、二十八宿といわれる行場があります。その中でも、ここ中津川の行者堂は昔から中台と呼ばれ、重要な儀式が行われてきました。

幕末期、ペリーの黒船来航の翌年、嘉永7年(1854年)には、異国船退散のため、聖護院宮雄仁親王を

はじめ、600人が中津川へ入峰し、祈りました。その5年前にも、役小角千五百年忌行事として、雄仁親王が中津川へ入峰しました。そして親王は十禅律院へ、その他の人々は粉河の町家へ宿泊したと言われています。

修験道の開祖である役小角が山々を切り開いたとき、前鬼と後鬼が従者として仕えたと言われています。そしてここ中津川は、中世より、前鬼の子孫が住む村でした。5つの家が五鬼家と称され、それぞれの家の代表1人の計5人が、当時の天皇聖護院宮から老分として官名を賜り、特別な存在であるとされてきました。そして現在も、その子孫たちが護摩供の準備や道掃除、餅なげの用意などを行い、山伏たちを受け入れていきます。

【問い合わせ】紀の川市文化財保護委員会(Ⅷ64・2525 生涯学習課内)

文化財



わたしのまちの文化財

◎紀伊国分寺古代瓦展

奈良・平安時代の国分寺古代瓦(鬼瓦3種、軒丸瓦13種、軒平瓦15種)を展示します。実物の瓦を用いた軒先瓦葺き、5分の1サイズで復元した軒の模型も展示します。

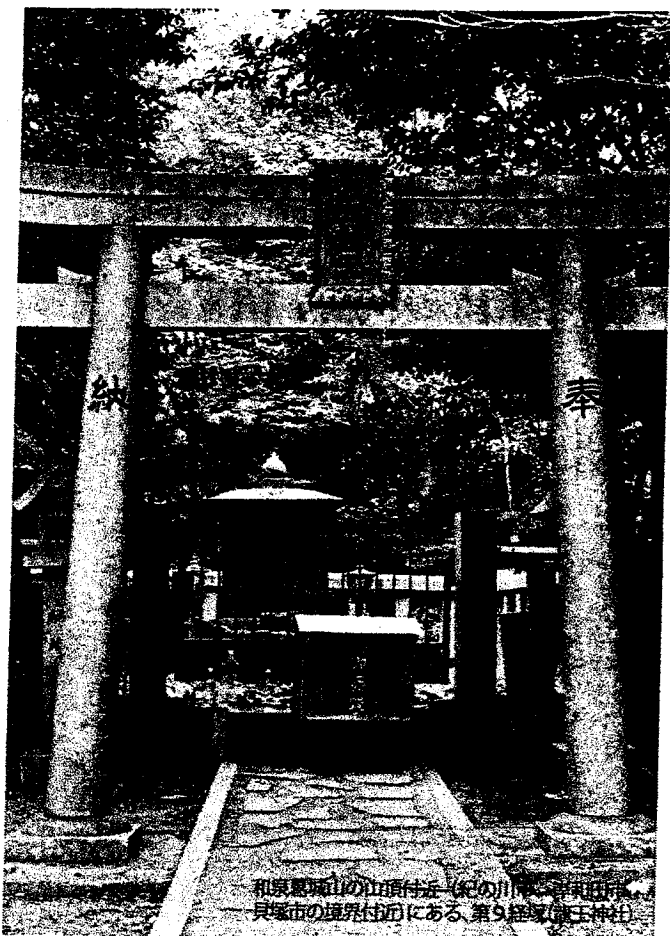


■ところ…紀の川市歴史民俗資料館

■とき…11月2日(木)～30日(土) ※毎週月・火曜日と、4日(金)・24日(木)は休館

※11月13日(日)にシンポジウム「紀伊国分寺と南海道」を開催します。

【問い合わせ】生涯学習課文化財係 (Tel. 64・9163 貴志川分庁舎)



和泉葛城山の山頂付近(紀の川市と岩出市の境界付近)にある、第9経塚(龍王神)

葛城修験の経塚

わたしのまちの文化財その④ 葛城修験

およそ1,320年前の飛鳥時代に、山伏の祖とされる役行者により葛城修験は開かれました。修験とは、山へ籠り修行をし、悟りを得ることを目的とする日本古来の山岳信仰が仏教に取り入れられた日本独特の宗教です。

和泉山脈・金剛山系(和歌山市加太の友ヶ島から奈良県・大阪府の境の大和川の亀石まで)には、約80kmにわたる修行の道があります。その間には、28の経塚(法華経28巻を1巻ずつ埋納した塚)と80か所の行場からなる修験道場があり、日本最古の修験の山々です。

平安時代から葛城修行を続ける京都の聖護院(本山派総本山)の調べによると、紀の川市内では4つの経塚が現在も営まれています。今畑の倉谷山の第5経塚・志野峠の第6経塚・中津川の第7経塚・和泉葛城山の第9経塚の4つです。

第9経塚は、紀の川市と大阪府の両方に広がる穀倉地帯の水源として信仰を集めていた和泉葛城山の山頂に祀られている水の神(龍王)の地に営まれています。そのため、この経塚は平安時代には龍宿と呼ばれていました。

修験の道は、岩出市押川から土仏峠を経て、尾根筋を東に進み、倉谷山経塚を巡り、神通から志野峠、松峠を経て粉河寺に参詣した後、中津川経塚へ至ります。さらに大阪燈明ヶ岳経塚(第8経塚)を経て、和泉葛城山を巡ります。途中の行場には、修行する人を守るために金剛童子石仏が祀られています。

倉谷山経塚が今畑・中畑・神通(神通畑)の三畑の人々に、また中津川経塚が中津川の人々に守られてきたように、修験道周辺の村人の支えによって、葛城山や熊野の山々を踏破した西行法師や修行者は修行を終えることができたのです。



修験道の開祖とされる役行者

【問い合わせ】紀の川市文化財保護委員会 (Tel. 64・9163 生涯学習課内)

文化財



わたしのまちの文化財

平安時代の中頃から終わりにかけて、人々、とりわけ当時の上層階級である皇族・貴族たちは、家の繁栄や個人の安寧を願い、さまざまな仏教的作善行を行うようになってきました。そのひとつが『経塚』の造営です。経塚というのは法華経や般若心経などのお経を紙に写経して、それら

を金属製の容器（経筒）に収め、さらに外容器といわれる陶器の甕などに入れて、地中に埋納した施設です。紀の川市では、粉河寺の本堂裏にある産土神社背後の標高80mほどの山腹で見つかったものがあり、『粉河産土神社経塚』と呼ばれています。昭和34年4月、

植林する際に偶然見つかったもので、その後近くからもう二基見つけて、合計三基の経塚が確認されました。このうち第一号経塚と呼ばれているものは、鑄銅製の経筒に書かれた銘文によると、平安時代の末期である天治二年（1125）のもので、清原信俊という人

物が、六人の僧侶を雇って京都で法華経を書写したものを埋納したものであることがわかっていました。第二号経塚は、一号経塚の北東約6mの場所で見つかったもので、須恵質の片口鉢を蓋にした常滑の壺の中に経筒が納められていました。この経塚には鉄製の鈴や刀子などがいっしょに埋納されていました。

第三号経塚は、二号経塚の東側に隣接して見つかったものです。いずれにしてもこれらの経塚は、自らや家族の安寧を願った当時の人々の思いを知る貴重な資料と言えるものでしょう。

粉河寺を訪れた際には少し足をのばし、本堂裏の産土神社に参詣するとともに、こうした遺跡に思いを馳せていただければと思います。



粉河産土神社経塚

わたしのまちの文化財その④ 経塚

【問い合わせ】紀の川市文化財保護委員会（Ⅷ77・2511 生涯学習課内）

わたしのまちの

文化財

vol.103

中津川行者堂（極楽寺） の碑伝・護摩札

畿の川市文化財保護委員会
(TEL77・2511 生涯学習課内)

▼嘉永2年碑伝



▼慶安5年護摩札



▼慶長13年碑伝



峯入りした修験者が、名前と入峯の年月日、あるいは入峯の回数や願文などを書き記して行場に納めた標識を碑伝（ひで）と言います。

葛城修験における聖護院の拠点であった中津川行者堂（極楽寺）には、江戸時代を通じて当地を訪れた修験者の碑伝が多数残されています。

また中津川では例年、春の峯入りの際（4月前半ごろ）に野外で大きな護摩壇を組んで火を燃やし、儀礼を行う採燈護摩が行われますが、碑伝と同様に、その執行者、年月日、願文を記した護摩札も同様に残されています。

これら近世の葛城修験における碑伝・護摩札の特徴は、その上部に守護神として「深蛇大王」と「二上権現」を記していることにあります。深蛇大王は葛城二十八宿のうち第一

経塚のある友ヶ島の深蛇池に住まうと言います。一方、二上権現は二上山に祀られる神格で、どちらも修験者を守る護法善神です。

中津川行者堂（極楽寺）には現在、江戸時代の碑伝が78枚、護摩札が60枚、判別不明分3枚の、合計141枚が確認されます。『紀伊国名所図会』によれば中津川阿弥陀堂（行者堂）条には「堂内に文安年中以下護摩修行の札を納む」とありますが、残念ながら文安年中（1444～1449）のものは残されておらず、最も古いものは慶長13年（1608）、「三井両峯先達捨身行者玉林坊権大僧都運□（□は判読不能）」と三井寺の行者の入峯に際しての碑伝です。

また最も古い護摩札は慶安5年（1652）のもので、聖護院の有力院家である若王子前大僧正の名代として千手院玄清・実性院存

永が護摩を行った際のものです。最大のものは、嘉永2年（1849）聖護院雄仁による碑伝で、長さ183・7cm、幅19・4cmを計ります。

これらの碑伝や護摩札は、通常野外の行場に奉納されたり木に釘打ちされたもので、そのまま朽ち果てることが多いのですが、中津川においては修験者のサポートを行う五鬼の家があり、恒常的な行場の管理が行われる中で拾得、保存されたために、今日まで伝わったものと見られます。

その結果、近世を通じて絶えることなく行われた葛城入峯の実態を具体的に跡づけることができる、修験道研究において注目される希少な資料となっています。

参考資料：「中津川行者堂（極楽寺）の修験道関連資料」（『和歌山県立博物館研究紀要』18、2012・3）